
艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 魚雷艇「島千鳥」型

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 魚雷艇「島千鳥」型

【Nコード】

N0318Z

【作者名】

火龍

【あらすじ】

史実において、日本は船舶用の小型で高い出力を持つ機関の製造に苦戦し、アメリカのPTボートに匹敵するような高速力の魚雷艇を安定して多数建造することが難しかった。一方勇の転移した過去では指定型船舶建造助成法の施行によって日本にも個人所有の遊覧船という存在が根付いたため、この問題は徐々に解消されていた。ところが、満を持して建造された魚雷艇はその情勢の変化によって、実に数奇な生涯を送ることとなる。本作は、「艦魂たちともうひとつの日本海軍史」外伝第二弾です。

第一話 判で押しした副産物

日露戦争後に施行された指定型船舶建造助成法により、民間の船舶保有量は飛躍的に増大。そして経済的に余裕のある人間の中には、二五トン級指定船や海軍の装載艇と同型の船艇を、個人用の遊覧船として保有する例も多くなっていった。

遊覧船の増加は、特に小型で高出力な船舶用機関を製造する技術を向上させる上で、大いに役立った。史実では小型船と言えば漁船ぐらいしかなかったために、魚雷艇や魚雷艇隼艇といった高速小型艇の建造に苦戦した日本であったが、その問題が解消されつつあったのである。

そして軍縮条約期、日本海軍は成熟した国内の技術を生かした魚雷艇の建造を計画。二五トン級指定船に大馬力の機関を搭載することで、以下のような要目の魚雷艇も建造可能であると判断された。

全長一七・五メートル、幅三・五メートル、喫水〇・七メートル、
深さ一・七五メートル

基準排水量二五トン、満載排水量三五トン

機関ディーゼル二基二軸、二四〇〇馬力、速力四〇ノット、燃料搭載量七・二トン

・航続距離

一〇ノット（一六〇馬力）で一九二〇海里（八日）

一五ノット（三六〇馬力）で一四四〇海里（四日）

二〇ノット（六四〇馬力）で九六〇海里（二日）

三〇ノット（一四四〇馬力）で七二〇海里（一日）

四〇ノット（二四〇〇馬力）で四八〇海里（半日）

・居住区

八名分（士官一、予備士官、下士官兵六）

・兵装

二〇ミリ単装機銃二基二門（航空機用の旋回機銃とほぼ同型。船首楼及び船橋後部）

五三・三センチ魚雷落射機二基（船体中央部左右）

爆雷八個（投下軌条二基、船尾に軌条を並列配置）

一番艇を含めた十二隻は一九三九年十月一日から各艇につき一日ずつずらして起工し、翌年二月二十八日から同じく一日刻みで進水。魚雷艇は鳥の名や鳥に関する言葉に因んで命名されることになり、一番艇の「島千鳥」を初めとして、以下の十二隻が各艇の進水した日を以て命名された。

島千鳥、菅鳥、菅根鳥、巢立鳥、田長鳥、巧鳥、黄昏鳥、橘鳥、種蒔鳥、旅鳥、千歳鳥、千鳥

さらに同時期、史実の隼艇を参考にした砲艇の建造も決定。魚雷落射機と引き換えにする形で、船体中央部の中心線上に二〇ミリ単装機銃二門を追加装備した砲艇十二隻が、進水と同日を以て以下のように命名されることとなった。

藍鮫、青鮫、油鮫、尾長鮫、神楽鮫、銀鮫、坂田鮫、蝶鮫、角鮫、猫鮫、鼠鮫、星鮫

根拠地に押し寄せる上陸船団等を主な目標とした魚雷艇と異なり、彼女たちの建造された目的は、敵小型舟艇の撃破や自軍小型艦艇の護衛であった。太平洋上の島々、特にフィリピンには米軍魚雷艇の配備が見込まれていることから、攻略に向かった艦隊が魚雷艇の攻撃を受けることも考えられるのだ。

当初は四〇ミリ機関砲の搭載も計画されたが、同じ単装でも一基当たりの重量が二〇ミリ機銃より桁違いに大きい（後者が二百キロ前後に対して後者は一トン以上）こと、また砲艇用にわざわざ四〇ミリ機関砲の単装砲架を新規設計する手間が嫌われたことなどから断念。米軍魚雷艇の船体は木製であることから、二〇ミリ機銃でも焼夷榴散弾を使えば威力に不足は無いとされた。

一九四〇年二月二十八日、横須賀海軍工廠。

「有馬中将、こちらです」

造船官の案内で勇が工廠の一角を訪れると、そこには二十四隻の小型艇が屋外に整然と並べられ、いつでも進水できる状態になっていた。とはいえ機銃や魚雷発射管等といった艤装品が搭載されていないため、彼女たちが軍用艦艇であることを示すものはその塗装ぐらいであり、形状は民間の船舶と酷似していた。

そしてまずは、スロープで海面へと降ろされた一番艇の「島千鳥」が進水。すると彼女の船首甲板が、常人には見えない閃光に包まれた。

（どうやら、ここにいる人間で艦魂が見えるのは自分だけのようだな）

進水した「島千鳥」に同乗していた造船官たちが、目前の閃光に對しても何の反応も見せないのを見て、勇は改めて艦魂が見える人間の少なさを実感する。そこに、横須賀で停泊中の戦艦「三笠」艦上から様子を見ていた三笠がやってきて、勇に耳打ちした。

（有馬中将、どうします？）

(右舷側にある居室のうち、一番船首寄りの部屋が予備士官室だから、そこに連れてきてもらえる?)

(了解です)

三笠が船首楼へと向かう様子を見届けると、勇は周囲で船体の状況を確認している技官に「艇内の様子を見てくる」と言い残して、予備士官室へと先回りをする。そして数分後、三笠が「失礼します」と告げた後に、「島千鳥」の艦魂を連れて部屋に入ってきた。

第一話 判で押しした副産物（後書き）

作者「確かにあらずじどおり数奇な運命ではあるけれど、ただグダグダになっただけのような気がしないでもないと言ってみる」

富士「十話目まで書いておいてそう言うか。しかし、魚雷艇にまともな居住設備を設けられるのか？」

作者「基本的に、船体が漁船とほぼ同型ですからね。四〇ノットも速力が出せるのであれば、あとは居住性の改善や武装の強化を試みたほうが良いでしょう」

大隅「いつそ、航続距離や居住性を捨てて魚雷を四本搭載しては？
アメリカで建造された黎明期の魚雷艇を見るに、この排水量であれば不可能でもなさそうです」

作者「そうになると、汎用性が薄れたり改設計の手間が増えたりする。ネタバレになるけれど、魚雷戦専門じゃあできることが限られて結果的に寿命を縮める羽目になりかねないから、純粋な魚雷艇としての能力には多少目を瞑ったよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「今回は艦魂の登場と雷撃訓練を描きます。次回『魚雷は貴重品』ご期待ください」

第二話 魚雷は貴重品

三笠と共に予備士官室へ入ってきたのは、身長が三笠と同程度で顔立ちが幼いものの、凛々しい目と肩の辺りまで伸びた黒髪を持つ艦魂であった。

「有馬中将、お初にお目にかかります。自分が島千鳥型魚雷艇一番艇『島千鳥』です」

低いがよく響く声で自己紹介を終えると、島千鳥は機敏な動作で立礼を行う。その様子は上総に匹敵するような実直さを感じさせたが、背が小さめなこととどこかあどけなさの残る顔によって、見る者に威圧感を与えるようなものではなかった。

「ところで、我が軍で初めての魚雷艇ということになりますが……彼女の階級は何ですか？」

「軍艦ではない艦艇で構成される隊のうち、一番艇ということはまず間違いなく最も小さな番号の隊を指揮するから……兵曹長、ということになるのかな」

「しゅ、就役直後からですか？」

勇が提示した階級を聞いて、島千鳥は大きな声を上げる。彼女は自分の船体が小さいことから、自分は水兵扱いだと一人合点していたのだ。

「就役直後に連合艦隊旗艦を務める、つまり大将になることもあるから、特別なことではないよ」

「それに階級が上だからと言って、やるべきことが急激に増えるわけでもないですから」

「し、しかし……兎も角、最善は尽くします」

勇と三笠が安心させようとしても、島千鳥は目を逸らせて狼狽えるばかり。それでも根は生真面目であるので、彼女なりのせめてもの礼儀として「最善を尽くす」という言葉を使って口を濁した。それ以上の答えに窮した彼女は、どうにか話を変えようとする。

「ところで、私の姉妹艇は何処に？」

「明日から一日一隻ずつ船体を進水させて、それから順次艤装工事に移る。もう船体はほぼ完成しているから、全ての艇を一日で進水させることも不可能ではないけれど、それだとどちらが先に進水したかというので艦魂同士のいざこざの元になりかねないからね」

もしこの処置を行ったのが戦時であれば、一日でも、そして一隻でも船が欲しいであろう状況下では不合理な方策とも考えられる。しかし今は対米戦がいつ勃発してもおかしくないとはいえ飽くまで平時であり、また勇はこれまでの経験から艦魂の精神状態が船体に重大な影響を及ぼすことを承知していたので、敢えてこのようにしたのだった。

「そ、それは……確かに」

勇の考えを知った島千鳥は、彼が予想以上に艦魂のことを考えていたと知り、驚きを隠せない。

「もうこんな時間か。名残惜しいけれど、そろそろ戻らないと他の技師たちに怪しまれるな」

「そうですね……また来てくださいね」

「暫くは魚雷艇たちのを見届けるという理由があるから、ほぼ毎日来られるはずだよ」

「本当ですか？ 有り難う御座います！」

「それやあ、また明日」

「はい！」

喜色満面の三笠を見て自らも頬を緩めながら、勇は予備士官室を後にする。幸い他の部員に勇の不在を怪しむ者はおらず、勇はこの後もおよそ半月に亘って魚雷艇の進水に立ち会うとの名目で海軍工廠に通い詰め、三笠たちと話をする事ができた。

進水した魚雷艇は一カ月程度で艤装を終え、相次いで就役。駆逐艦や潜水艦と同じく四隻で艇隊を、三個艇隊で魚雷艇隊を編成し、実用性を試験した後に四隻や十二隻を一単位としての戦闘訓練が行われることとされた。

一九四〇年四月十日、横須賀沖。

「据え物切りとはいえ、初の魚雷発射……気は抜けません」

海上に浮かぶ標的艦「浅間」に向け、「島千鳥」が四十ノット近い速力で突進する。そして彼我の距離が一海里程度にまで詰まったところで、「島千鳥」の左舷に設置された蝶番型の金具が外側へと倒され、訓練用の魚雷は無事「浅間」目掛けて放たれた。

この魚雷は目標に命中するか、あるいは一定距離を走った後に停止して、魚雷内部の気室によって浮上するようになっている。これにより標的が損壊する心配も無く、また空気を充填すれば何回でも訓練に使用できるようになっているのだ。

訓練用魚雷が再利用可能であることは、日本に限った話ではない。しかし当時の魚雷の価格は史実の現代における一億円に相当するた

め、モリブデンなどといった希少な金属を使用することもある。資
源や予算余裕の無い日本には他国にもまして貴重品なのである。

「三……二……一……当たりました、よね？」

島千鳥が、懐中時計で自分が放った魚雷の命中予測時刻を確認し
て間もなく、「浅間」から手旗信号で船底への魚雷命中を確認した
ことが伝えられる。それを見届けた島千鳥は安堵の息を漏らすと、
予備士官室へと戻っていった。

第二話 魚雷は貴重品（後書き）

作者「因みに、現代の一億円はハーブーン一本分だそうです」

富士「時代の異なる貨幣の価値を換算すると、基準とするものによって相当な誤差が出るのは必定だが、同じく対艦攻撃を目的とする魚雷とハーブーンが同一価格だというのは偶然にしては出来過ぎているような気もするな」

作者「なお魚雷一本は首相の年俸二年分、陸海軍大将の年俸三年分をそれぞれ若干上回るとのこと」

敷島「それを基準にしたら、現代の五千万円ぐらいになりそうだけどねえ……とはいえ海軍少尉の年俸だと二十人分を超えるから、そんなものなのかなあ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「対米開戦を迎えましたが、彼女たちの出番はなかなかやってきません。次回『特化ゆえの焦り』ご期待ください」

第三話 特化ゆえの焦り

その後の各種試験でもおおむね良好な成績を収めた「島千鳥」型魚雷艇は、対米戦時における島嶼の攻略及び防衛に備えて対米開戦までに四十八隻が就役。四個戦隊の陣容で、一九四一年十二月四日の対米開戦を迎えることになった。

一九四一年十二月八日、第二艦隊に随伴している輸送船団の旧捕鯨母船「扶桑丸」。彼女の甲板上には「島千鳥」型魚雷艇の第一陣である十二隻が並べられており、艦尾のスロープから海面へと降ろされ、フィリピン周辺の米海軍小型艦艇を掃討することになっていた。

即ち、捕鯨母船時代に鯨を甲板へと引き揚げていた動作の逆を行おうというのである。対米戦前の一時期において捕獲されていた鯨の一種である白長須鯨は長さが二十から三十メートル、体重が百五十トン程度あったため、巻き揚げ機等の設備を強化せずともそのまま魚雷艇を揚げ降ろしできるのだ。

後に、この際の経験を活かして同型の捕鯨母船「神州丸」は上陸用舟艇四十八隻を收容できる母艦に改装される。そして翌年十月のミッドウェー諸島の攻略時にその能力を遺憾なく発揮するのであるが、それはまた別の話である。

「姉さん、姉さん！ アメリカが本当に宣戦布告をしてきました！」「やはり……とはいえ今更止めたと言われたら、一度抜いた刀を鞘に戻さなくてはいけないところだった」

母艦である「扶桑丸」の電信室で張り込みをしていた「菅根鳥」

の艦魂、菅根鳥が慌てた様子で「島千鳥」の予備士官室へと駆け込んでくる。彼女は姉妹の三女であったが、身長は島千鳥よりいくらか高く、見た目も姉が二、三年成長したような姿であった。なお、菅根鳥とは雉の別名である。

但し性格は真面目でこそあれ、姉のように落ち着いたものではなく、事あるごとに闘争本能をむき出しにする荒々しいものであった。そのため島千鳥としては妹の猪突猛進ぶりを危惧していたのだが、これまでは必要に迫られなかったためにあまり強く言うことも無かった。

「こうなったら、私たちでフィリピンにいるアメリカの船を一隻残らず沈めましょう！ 十二隻で魚雷を立て続けに発射すれば、沈められない船などいやしません！」

「落ち着いて。まだ、フィリピンには戦闘機と爆撃機だけで二百機を超える航空機がいる。そんな状況でまともな対空兵装を持たない私たちが出れば、ただ素早いだけの的になるのは明らか」

「なら……なら、いつ出撃するんですか！」
「まず高雄からの航空攻撃と第二艦隊の艦砲射撃で、敵の航空基地を叩く。そうすればフィリピンにいる魚雷艇や砲艦を、私たちの手でより確実に仕留められるようになる」

出撃の時を今や遅しと待ち望む妹に圧されぬよう、島千鳥は説得を試みる。その後も史実で日本軍が行った水上機によるアメリカ軍魚雷艇の掃討や、反対に昭和二十年五月、日本軍第五特攻戦隊の魚雷艇十二隻が川棚から天草まで「震洋」二十六隻を護衛中、米戦闘機の攻撃を受けて壊滅的打撃を受け司令官も戦死してしまった事例を挙げ、航空機に攻撃された魚雷艇が如何に脆弱化ということを読んだ。

「くっ……姉さんがそこまで言うなら」
「すまない。早く初陣を迎えたいのは、私も一緒だ」

冷静さを取り戻したものの悔しさや苛立ちを隠しきれない妹を見て、島千鳥も不満げな表情になる。二人とも魚雷艇として戦争を迎えたからには、一度でもいいから自分が放った魚雷で敵艦を沈めたという信念を持っているため、ただ自分の船体が輸送船の甲板上に置かれているのを見るのは悔しかった。

また、日本にとってはこの戦争における相手国が事実上アメリカだけであるということも、二人の焦りを深刻なものにしていた。航続距離や凌波性で劣る魚雷艇にとって、アメリカとの主戦場となるであろう太平洋での活動には限界があり、精々占領した島の周辺を警備することしかできない。そうなれば当然、敵艦と遭遇する可能性は極めて低くなる。

そんな中、アメリカ側がある程度有力な艦船を配備しつつ、また魚雷艇も自由に航行できるほぼ唯一の海域がこのフィリピン近海だったのである。即ちフィリピンで敵艦に雷撃する機会が無ければ、彼女たちが実戦で魚雷を発射する機会はほぼ無くなってしまふのだ。

この日、第二艦隊はアメリカ海軍アジア艦隊との砲撃戦で、航空部隊はマニラへの航空攻撃で大戦果を挙げる。それを聞いた二人の焦りは、いよいよ限界に達しつつあった。

第三話 特化ゆえの焦り（後書き）

作者「この外伝も粗方書き終えましたが、次はどうするやら」

朝日「まだ、外伝の題材は残っているのでは？」

作者「一応、これ以外に四作品は書ける題材がある……艦魂の設定を思いつけば、だけど」

敷島「で、その四作品は？」

作者「兵装試験艦を兼ねたモニター、『海龍』のような有翼潜水艇、本編にも登場した黎明期の潜水艦、そして非現実的な感じが否めない潜水航空戦艦です」

大隅「せ、潜水航空戦艦とはこれ如何に？」

作者「作れるかどうか分からない、国威発揚と戦後の経済効果を狙った艦だよ。一応、建て前では大型潜水艦の建造技術を獲得するために建造するという事になっているけれど」

三笠「なら航空機、ましてや大型の艦砲を搭載する必要はないと思います……次回予告をお願いします」

作者「次回からは、ほぼ唯一と言ってもいい海戦の場面です。次回『明暗分かつ第一射』ご期待ください」

第四話 明暗分かつ第一射

開戦初日の攻撃で、アメリカ海軍アジア艦隊水上艦部隊と潜水艦にそれぞれ打撃を与えた第二艦隊と高雄航空隊は、翌日からフィリピンの砲台及び飛行場の攻撃に移行。開戦から三日間で主だった砲台や航空基地を破壊し、フィリピンの残存航空戦力は多くとも五十機未満と見積もられた。

一方の米軍は、アジア艦隊に主力水上艦艇や潜水艦を除き以下の艦艇を配備していた。そこで十二月十二日、第一魚雷艇隊に対し、主力を失ってコレヒドール周辺に遁走したこれらの艦艇を撃破せよとの命が下ったのである。

- ・エリー級砲艦（エリー、チャールストン）
全長一〇〇・一五メートル、排水量二〇〇〇トン、速力二〇ノット
四七口径六インチ単装砲四基（艦首と艦尾に背負い式）
- 二八ミリ四連装機銃二基（二番主砲艦尾側及び三番主砲艦首側、各主砲からさらに背負い式に配置）
- 三ポンド砲二基（艦橋上部両舷。二八ミリと合わせて四〇ミリ四連装機関砲に換装されていた説もある）
- 水上偵察機一機搭載（カタパルト無し）
- ・PT-3級魚雷艇（PT-3、PT-4）
全長一七・六七メートル、基準排水量二五トン、速力三二ノット
五三・三センチ魚雷発射管四基
- ・PT-5級魚雷艇（PT-5、PT-6）
全長二四・六八メートル、基準排水量三四トン、速力三一ノット（PT-6は三六ノット）
- 五三・三センチ魚雷発射管四基

十二月十二日午前九時、十二隻の魚雷艇はコレヒドール島西方五十海里の「扶桑丸」より出撃。四隻ごとに縦陣を組んで二十ノットの速力でコレヒドールへと向かっていたところ、およそ二時間後に前方から向かってくる二隻の砲艦を距離十三海里で捉えることができた。

「十二時の方向に縦陣を組む砲艦二、速力二十ノットでまっすぐこちらに向かっています！」

「第一艇隊及び第二艇隊は一番艦、第三艇隊は二番艦を攻撃せよ！」
「面舵三十、前進全速！」

魚雷艇を発見した「エリー」級の二隻は艦首の六インチ砲で砲撃を加えるが、四十ノットの高速で航行する「島千鳥」型魚雷艇を捉えることは容易ではない。四七口径六インチ砲の初速は秒速七六二メートルであり、例え二海里しか離れていない目標に発射した場合でも、着弾までにおよそ五秒はかかるのだ。

そして四十ノットの最高速力を有する「島千鳥」型なら、その五秒間で百メートル程度移動することができる。この数字は同じく「エリー」級の持つ二八ミリ機銃でも一割弱しか変わらず、ましてや一基で五トン近くもある鈍重な四連装機銃なのだから、どちらにせよ魚雷艇をまともに追尾するなど不可能であった。

とはいえ方が一にも六インチ砲弾が直撃すれば轟沈も有り得るため、各艇の乗員たちに緊張が走る。ところが幸い、魚雷発射前には一隻も直撃弾はおろか至近弾さえ受けずに懐へと飛び込むことができた。

「どうせなら、巡洋艦を仕留めたかったが……敵艦を討てるだけ、良しとしなくては」

未来位置を予測されて見越し射撃をされないよう小刻みに方向を変えながら、「島千鳥」たちは二隻の砲艦目掛けて肉薄する。その後目標との距離が一海里を切ったところで、各艇の艇長が一本目の魚雷を放つよう命じた。

「敵一番艦まで、距離一海里！」

「右舷魚雷投下！」

様々な方向から立て続けに魚雷を放たれ、「エリー」と「チャールストン」は右往左往するばかり。二隻は必死に回避運動を展開しようとするが、二十ノットの速力では移動距離にも舵の効きにも限界があり、彼女たちの状況は同じように攻撃を受けた輸送船と何ら変わらなかった。

一番槍として「島千鳥」の右舷魚雷が投下されてからおよそ一分半後、「エリー」の左舷艦首に水柱が立ち上る。同時に二千トンしかない彼女の船体は左右に大きく振動し、間もなくその船足も目に見えて鈍り始めた。

「よし、まずは一本！」

盛大な水柱を目の当たりにした島千鳥が、拳を握りしめながら叫ぶ。しかしその表情に油断や満足感といったものは無く、彼女の関心事は早くも自分の左舷に搭載された二本目の魚雷を命中させることができるかどうかの一点に絞られていた。

第一射の命中を確認した「島千鳥」の艇長は、再度「エリー」の左舷から突入を図る。魚雷の命中による応急処置のためか迎撃のための砲火は鳴りを潜めており、これ以降魚雷を放つ艇は当の「島千

鳥」を含めてより容易に射点へとつくことができるようになった。

「姉さんはやっぱり当てたか……なら、私が外すわけにはいかない
」！」

菅根鳥が姉への対抗心を剥き出しにする中、「菅根鳥」の右舷から魚雷が投下される。彼女は自分の船体から放たれた魚雷の航跡をじっと見つめていたが、あるうことかその魚雷は目標である「エリ」の艦尾を掠るようになり過ぎてしまった。

「よし、このままなら……ってあーっ！　なんでそこで通り過ぎるんだよっ！」

悔しさと苛立ちから、菅根鳥は自分の髪を掻き毟る。そして一頻り掻き毟ると、「畜生、次は必ず当ててやるからな！」と吐き捨てた。

各艇が一本ずつ魚雷を発射し終えた段階で、「エリー」には左舷艦首に「島千鳥」の、右舷艦首に「黄昏鳥」の放った魚雷がそれぞれ命中。「チャールストン」も左舷中央部に「千歳鳥」の魚雷を受けており、二隻は早くも艦首が沈下し始めていた。

しかし、この時点で放たれていた魚雷は飽くまで各艇一本ずつ。そして五分と経たぬ間に、二隻の砲艦は再び魚雷の洗礼を受けることとなった。

第四話 明暗分かつ第一射（後書き）

富士「無粋だとは百も承知だが……普通、この二隻も航空攻撃で仕留めないか？」

作者「その方が安全かつ確実なのは、無論分かっていますが……空母が一隻しかいませんし、その艦載機も対地攻撃にかかりきりになっているのでしようと言いつを考えてみる次第です」

敷島「攻撃機の航続距離が長いんだから台湾、ブルネイと南洋諸島の三方向から攻撃隊を出せば、魚雷艇どころか母艦搭載機を使わなくても十分フィリピン全域の敵を叩けそうだけどねえ」

作者「とはいえ、この後彼女たちはどうしても冷や飯食いを強いられてしまうので、今のところはご勘弁を」

三笠「安全性よりネタを優先した弁解はさておき、次回予告をお願いします」

作者「第二射直前の『島千鳥』を、ある緊急事態が襲います。次回『自己操舵』ご期待ください」

第五話 自己操舵

再び、十二隻の魚雷艇が二隻の砲艦を襲う。だが目標の割り当てを変えなければ、「エリー」に攻撃が集中して「チャールストン」の損傷が軽微なまま逃走される恐れがあるため、第二射は第一射と逆の艦を狙うよう各艇に指示が飛んだ。

「この割り当てでは、攻撃が分散して最悪の場合二隻とも取り逃がす……なら、一本も無駄にはできない！」

一瞬にして最悪の事態を想定した島千鳥が、先程以上に緊張した面持ちで今度は「チャールストン」を見据える。「黄昏鳥」の魚雷によつて彼女の速力は十五ノット程度まで落ちていたが、魚雷艇を近づけまいと健在な砲や機銃を乱射しており、「島千鳥」たちは激しい回避運動を余儀なくされた。

「このままでは、魚雷の発射時期を逸してしまう……っ！」

左右に揺さぶられる「島千鳥」の船首で、島千鳥は艇首の旗竿を右手で掴みながら歯噛みする。そんな「島千鳥」の様子を、後方から菅根鳥が恨めしそうに眺めていた。

「どうしたんですか、姉さん！ 言っちゃあ悪いですけど、姉さんが前でうろろしてたらこっちだって撃つに撃てないんです！」

姉と同じく一刻も早く魚雷を投下したい菅根鳥は、堪忍袋の緒が切れて絶叫する。喫水が浅い「島千鳥」型の船体に魚雷が直接命中する恐れは小さいものの、魚雷の信管が四十ノットの高速で航行することにより発生する海水の流れに反応し、魚雷が船体の至近距離

で爆発してしまう恐れがあるのだ。

「わかっている！　だが、私が私の船体を動かせるわけじゃない！」

その直後、「チャールストン」が遮二無二放っていた機銃の一斉射が「島千鳥」の艦橋を射抜く。同時に千鳥の頭からも一筋の血が流れ、痛みこそ大したことは無かったものの、彼女の脳裏を最悪の事態がよぎった。

「頭から少量の出血、ということは艦橋が機銃掃射を……まさか！」

島千鳥が艦橋に移動すると、そこでは艦橋にただ一人残って舵をとっていた艇長が頭に二八ミリ機銃の直撃を受け、見るも無残な姿で倒れていた。その光景に彼女は言葉を失ったが、すぐに事の重大さに気付くと、慌てて自分の舵輪に駆け寄る。

「くっ、私が人間なら他の乗員を呼べるというのに！」

乗員たちは機銃による「チャールストン」への牽制や魚雷の発射準備にかかりきりとなっており、誰一人として艇長が戦死したことに気付かない。このままでは「島千鳥」は操舵の自由を失った状態での航行を余儀なくされ、他船との衝突やさらなる被弾といった事態が考えられた。

そこで彼女は、自分の操舵を自分で行うことを決意。勇の後知恵や日本軍の諜報活動によってもたらされていた「エリー」級砲艦の武装配置から、二八ミリ機銃の配置場所が艦橋前と三番主砲手前（即ち何れも艦の首尾線上）であることを知っていたため、片方の機銃にしか狙われずに済む艦首からの接近を試みた。

また既に「チャールストン」は艦首に一本の魚雷を受けていたため、艦首に雷撃を集中することで船体の傾斜を悪化させることも島千鳥は狙っていた。無論、艦の真横から接近しないことによる雷撃命中率の低下は百も承知であったが、既に魚雷を「エリー」に当てているという事実からくる心の余裕が彼女にその代償を受け容れさせたのである。

「ええい、私の乗組員は何をしている！」

なかなか艦橋に來ない乗員への苛立ちを堪えつつ、島千鳥は左右に激しく舵を切る。だが運悪く、再び「チャールストン」の艦首機関砲によつて一斉射が「島千鳥」の船首と艦橋を薙いだ。島千鳥は咄嗟にうづくまつて機銃弾を避けると、やがて立ち上がり周囲を見渡す。

「くっつ！ ……良かった、乗員は無事みたい」

この被弾で島千鳥自身の体には多数の小さな傷が生じたものの、彼女はそのことを全くと言っていいほど気にしなかった。自分の船体を自分で操縦していることへの興奮と緊張から、痛覚を含めた感覚が半ば麻痺していたのである。

同じ頃、「島千鳥」後部上甲板。

「なあ、いつになったら魚雷の発射指示が出るんだ？」

「分かりません……自分が、艇長にお尋ねしましょうか？」

「ああ、頼む。まさかとは思うが、さっきの機銃掃射で何かあったのかもしれないからな」

下士官の命を受けた水兵が、艦橋を訪れる。そして島千鳥と同じ

ように、無残な姿になった艇長を発見すると、すぐさま踵を返して下士官の元へと戻った。

「て、艇長は頭を撃たれて戦死！」

「何だと！……仕方ねえ、俺が操舵を代わる！ 魚雷の落射指示を出したら、お前が落とせ！」

「はい！」

間もなく下士官は艦橋に入り、艇長を見ると忌々しげに舌打ちをする。そして舵を握ろうと舵輪に近づいてきたため、島千鳥は緊張が少しだけ解けてほっとした様子でその場を退いた。

「ふう。二人が入ってきたときに舵輪を回していたら、怪奇現象として扱われるところだった」

「へっ、これだけ近づいていれば……魚雷投下！」

下士官の怒号とともに、島千鳥から二本目の魚雷が発射される。半海里程度の距離にまで接近して放たれた魚雷を避けるのは困難であり、程無くして「チャールストン」の艦首正面を深々と抉って見せた。

第五話 自己操舵（後書き）

朝日「生身の人間がこの口径の銃弾を浴びたら、どうなるのでありましょう？」

作者「自分のような奇特な人間は別として、正視に堪えない状態になるであろうことは想像がつくよ」

富士「そう言えば、何時ぞやは生身の兵士に四〇ミリ機関砲を使っていたな」

作者「まあ、少なくとも確実ではありませんから」

三笠「ボフォース四〇ミリともなると、却って当てるのが難しくなつて確実性に欠ける気もしますが……次回予告をお願いします」

作者「一仕事終えた彼女たちの未来に、暗雲が立ち込めます。次回『理想と現実の乖離』ご期待ください」

第六話 理想と現実の乖離

「ざまあ見る！ 艇長の仇だ！」

「よし、後は離脱するだけだ」

魚雷を受けた「チャールストン」の艦首に立つ水柱を見て、島千鳥は満足気な笑みを浮かべる。そして艦首に二度も大穴を開けられた「チャールストン」へと、魚雷の投下を待ちかねた「菅根鳥」が間髪入れずに襲い掛かった。

「今度こそ当てなきゃ、姉さんに示しがつかないんでね！」

「魚雷投下！」

先程魚雷を外した「菅根鳥」から、二本目の魚雷が投下される。

その魚雷は狙い過たず「チャールストン」の左舷艦橋直下へと吸い込まれていき、既に艦首が大きく沈み込んでいる彼女にとって、まさに止めとなり得る三本目の命中魚雷となった。

「よしっ！ やるべきことはやった、とつととずらかるよ！」

「取舵一杯、『島千鳥』に続いてこの海域を離脱する！」

だが、「エリー」と「チャールストン」の災厄はこれで終わったわけではない。その後「エリー」には「千鳥」、「チャールストン」には「巢立鳥」の魚雷が命中し、最終的な魚雷の命中数はそれぞれ「エリー」が三本、「チャールストン」が四本に上った。

そして二隻とも、魚雷命中から三十分乃至は一時間後に相次いで沈没。こうしてアメリカ海軍アジア艦隊に残された最後の大型艦である「エリー」級砲艦は二隻とも失われ、後には魚雷艇や雑役船と

いった小型舟艇だけが残された。

そして彼女たちも、第二艦隊の攻撃機や水上偵察による航空攻撃で全滅。フィリピンに配備されていたようなアメリカ軍における初期の魚雷艇は機銃を装備していないため、航空攻撃に対しては日本の「島千鳥」型にもまして無力であった。

アジア艦隊水上戦力の全滅が確認されたため、「扶桑丸」は十二隻の魚雷艇を回収すると一足先にフィリピン周辺海域を離脱。十二月二十八日にトラック諸島へ到着し、次期作戦に備えて修理と訓練を行うこととされた。

翌日、「扶桑丸」船上。

「あーあ、これで私たちも事実上お役御免なんでしょうか？ まさか、小島が多いからってアラスカのほうにまで行けとは言われないでしょうし」

「その公算が大きいな。まだ太平洋上にはサモア、ミッドウェー、パルミラと米軍の拠点が少なからずあるが、何れもウエークやグアムのように連合艦隊主力で叩くことになるだろうし、私たちをわざわざ連れて行く必要性が無い」

姉の言葉に、菅根鳥は寂しそうにため息をつく。自分の百倍近い排水量を有する艦二隻と戦闘し、姉妹と共同で両方の撃沈に成功したとはいえ、彼女の心中にある戦闘艦艇に宿った艦魂としての功名心や闘争心といったものを満たすには程遠かったのだ。

「史実みたいに、ニューギニアやソロモンで戦うことになればなあ。それこそ、魚雷艇や上陸用舟艇相手に数十隻同士での切った張ったができるのですが」

「だがそうなれば、我が国の被害も増大する。魚雷艇の艦魂としては望むところだが、日本海軍の艦魂としては同意しかねるな」

「それもそうですよねえ……うーん」

ところが日本軍によるフィリピンの占領後、アメリカ軍から物資や兵器を譲渡されていた民兵組織がフィリピンの各島で蜂起。これに対し日本軍は今村均陸軍中将に軍政の指揮を執らせ、日比協約の締結により一九四五年中の独立を保障するなど民心の掌握に努めたが、完全な鎮撫には至らなかった。

そこで民兵に対する武器の買い上げも行われたが、これに従わない例が続出。ここに至って、日本陸軍は比島上陸時に用いた上陸用舟艇を使い回して各島の巡回や武力制圧を行い、また日本海軍に対しても民兵の鎮圧に当たって協力を求めてきた。

これに対し、海軍はトラックにいた「扶桑丸」と十二隻の魚雷艇を派遣し、上陸用舟艇の護衛や対地支援に当てることを決定。大型艦艇との遭遇が想定されていない状況下での火力支援ということで魚雷落射機を外し、十六連装五インチ噴進弾発射機と陸軍用の迫撃砲を各一基搭載するという改装を受けたのだった。

第六話 理想と現実の乖離（後書き）

作者「我ながら、この船は使い物になるんだろうか？」

富士「米軍がベトナム戦で使った河川哨戒艇には、迫撃砲や擲弾銃が搭載された艇もいるらしい。少なくとも、まず使わないであろう魚雷を装備したままの状態で行くよりはましだろうな」

敷島「それに、米軍が使った揚陸艦艇の中にはロケット弾発射機を並べたのもいるしね。ただ、数の不足が気になるけど」

大隅「ところで、無粋なことをお尋ね致しますが……彼女たちは最早『魚雷艇』ではないのでは？」

作者「少なくとも建前では飽くまで仮の武装だから、艦種類別はそのまま。ただ、このあともっと変わった役目に回されることになるよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「果たして、変わり果てた自分たちの船体を見た彼女たちの反応は如何に？ 次回『艦魂なりの自我』ご期待ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318z/>

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 魚雷艇「島千鳥」型

2011年12月11日05時52分発行